

Title	英語の「核となる表現」を求める
Sub Title	In search of 'Core expressions' in English
Author	高橋, 潔(Takahashi, Kiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2001
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 No.37 (2001. 3) ,p.52- 73
JaLC DOI	
Abstract	<p>This article is an experiment to select `core expressions' in English for Japanese learners of the English language. English sentences have traditionally been thought to be com-posed of phrase(s), and phrases are composed of word(s). This is partly true, but from this point of view, words are the basic elements to be learned and stored in our brain, which are later combined by grammatical rules. However, this 'word-based' theory seems to be wrong. There seems to be many cases in English where the occurrence of one word predicts the occurrence of another, either following or preceding it. Many of them do not make `idioms' but they are very close combinations of highly used frequent words. These close combinations of words or collocations are reasonably stored in our brains as a unit. It is these collocations that greatly decide whether our expressions are natural or not although it is sometimes very difficult to explain why. By examining all the texts in Japanese high school textbooks "English I and II", the author tried to find what combinations there are and then examine which should be included among essential collocations for the Japanese learners of English.</p>
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20000930-0052

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

英語の「核となる表現」を求める

高 橋 潔

0. 日本語に劣らず、英語にも非母語者には説明しにくい表現が少なくない。それぞれを母語とする者なら決して用いない表現なのだが、理論的説明にはなじみにくいといったものである。こうした語結合に関連して Patrick Hanks は次のように言っている。

あり得る (possible) 結びつきと典型的な (typical) 結びつきとの区別は、きわめて重要である。ある程度の生きた想像力を備えているものなら、ある単語をいろいろなやり方で用いることは可能である。しかし、ある語がどのように用いられ得るかではなくて、典型的にはどのようにして用いられるかを問うとき、通常は比較的少数のはっきりした型 (patterns) を見いだし得る……¹

私見ではこのあたりの事情が英語学習者の表現力獲得の過程であまりはっきりとは位置づけされていないようである。この小論では「典型的な (typical) 結びつき」にこだわって、それが英語の習得上どのような意味合いを持つものかを考えてみたい。

¹ Patrick Hanks, 'Definitions and Explanations' in Sinclair, J. M. (ed.) 1987 *Looking up*. Collins, p. 121

1.1 Grammatical collocations

- *Hardly I had left... (私が出発するやいなや)
- *That's an old fine house. (あれは古い, すてきな家だ)
- *I and John saw her. (ジョンと私は彼女を見かけた)
- *She switched on it. (そのスイッチを入れた)

これらは従来「文法」という視点から取り上げられてきたものに属する。英語を母語とする人なら, Hardly had I left..., That's a fine old house., John and I saw her., She switched it on. のように配列する。

上記*印のような配列は「文法規則違反」ということで処理されてきた。それぞれに「規則」めいたものを設定すると, ほかにもある類似現象を説明できるからである。²

1.2 Lexical collocations

- ?*Meals will be served outside on the terrace, weather allowing.³

この表現の「意味はわかる」のだが, 不自然である。英語の weather は allow と結びつかず, ここで意図している意味を表すには permit としか自然には結びつかない。つまり, 「自然な英語」にするには文末を

² 英語の例をつけ加えるなら, 次の例をどれだけ不自然と感じるであろうか。

1) a Lancashire old factory 2) a red old suit 3) the American entire army 4) an old superb house 5) a new beautiful dress

これらは, 英語を母語とするものなら, 迷うことなく 1) an old Lancashire factory 2) an old red suit 3) the entire American army 4) a superb old house 5) a beautiful new dress とするところである。
[David Crystal *The Cambridge Encyclopedia of the English Language* (CUP 1995) p. 223]

³ Jonathan Crowther et al. *Oxford Advanced Learner's Dictionary* 5ed. (OUP 1995) Study page A4

weather permitting とするか, They'll give us our meals outside if the weather is good enough. のような別表現をとることになる。これはいわば「単語同士の相性」とでも言うべきことで、文法レベルとはやや異なると見るのがふつうである。

英語の cold は, wind, winter, water といった単語とはすべて自然な結びつき (collocation; cluster) をなす。しかし目を転じて日本語だと, 「冷たい風」「冷たい水」「寒い風」「寒い冬」は不自然でないとしても, 「冷たい冬」には違和感を覚える向きがありそうだし⁴, 「寒い」は「水」と違和感なしでは結びつかない。比喩としての例外的場面を想定しない限り, 「*寒い水」という表現は日本語を母語とするものが用いることはほばないであろう。日・英のどちらであれ, それを母語とするものがこうした場合に特に意図しない限り, 自分の母語を不自然に用いるあるいは「間違える」ことはない。逆に言うなら, 通常「母語」とされる言語とはこのような不自然な結びつきを無意識のうちにさけ得るまでに習得している言語のことである。実際上記2例は, 日本語を習得中の外国人学習者によるおかしい日本語表現である。

同様に, 「濃い霧」「深い霧」, 「濃い煙」はあっても, 「*深い煙」は不自然で, 日本語を母語とするものなら選ばない単語の結び付けである。ところが英語では, ほば対応する thick fog, dense fog; thick smoke, dense smoke はいずれも自然な結びつきである。そのくせ thick forest, dense forest も自然だが, 日本語では「深い森」はあっても「?*濃い森」はふつうの文脈では許されない。逆に「濃い髪の毛」は許されても, ふつうは「?*深い髪の毛」は日本語では許されない。英語では thick hair は自然な表現で, *dense hair のほうは許されない。⁵

⁴ 「冷夏」「冷たい夏」はどうだろうか。

⁵ この例は, 英語と日本語を 1 対 1 の「訳語」対応で記憶する (あるいは, させる) ことの危険性を示している。極端にいえば, 同じ意味の語は 2 言語間に存在しない, からである。

「港の傍に、水に沿って細長い形に広がっている公園がある。その公園の鉄製ベンチに腰をおろして、海を眺めている男があった。」(吉行淳之介)⁶

読者はこの場合やはり吉行と同じくこの部分を「…海を眺めている男があった。」とするだろうか。筆者ならおそらく「…海を眺めている男がいた。」と書いたと思われる。⁷

英語にも日本語にも無数にあるこのような「文法」とも「単語の相性」とも言いにくいレベルで、その使い分け・選択の仕方がそれぞれを「母語」とするか否かを分けてしまうような表現がある。

2.1 「単語→句→文」と分析する発想を逆転させた N. Chomsky も含めて、伝統的な流れは基本的に「単語を基本単位として、それを統語規則に従って文法的に配列し、文章を作る」という考えに立ってきた。しかしながら、この考えでは説明がつかないのみならず、このように考えないほうがより合理的ではないかという言語使用上の事実が少なくない、と最近になって流れに変化のきざしが現れ始めた。つまり、我々の言語生活にあっては、文章・発話が統語規則に従ってその都度新たに生成されると考えるのには無理がある、少なくとも部分的にはあらかじめできあがった語の集まり (cluster) を再利用してなされているとする方が理屈に合う、とする考えが少なからぬ人々によって支持されるようになってきた。曰く、

⁶ 『砂の上の植物群』潮出版社 吉行淳之介自選作品IV p. 7

⁷ 『広辞苑』5版は「ある」の説明に

「ものごとの存在が認識される。もともとは、人・動物も含めてその存在を表したが、現代語では、動きを意識しないものの存在に用い、動きを意識しての「いる」と使い分ける。人でも、存在だけをいう時には「多くの賛成者がある」のように「ある」ともいう」のように用法説明を加えている。

「証拠によれば、単語は記憶の中に構造を持つかたまりとして保存されているようである。語句をその構成要素に分割するのは、可能な代替手段ではあるが、語句を用いる第一のやり方ではない」⁸

「言語の正常な使用では一度に2語以上からなる語句を選び、そのように選んだものをお互いに組み合わせているという意識が広がってきている」⁹

言語使用（ここでは英語の場合を考えているのであるが）の諸場面で、「単語と文法規則で」新しく発話を構成しようとすれば、必ずや時間をとられエネルギーを消費する。もちろんそのようにすることもあるからこそ、「話をしていてくたびれた」という現象が起こるのかもしれない。しかし、我々の言語使用はいわゆる「省エネ原理」をふんだんに用いるものであり、「人間は記憶力を用いて、(脳中に蓄えてある)定まった選択肢を用いることをまず行う。それがうまくいかないときに、新しく構成する作業に訴える」¹⁰とするのが、より説得力があると思われる。すでに学習済みの表現を、ふんだんに再利用しながら我々は言語活動を行っているのである。いつも同じ話をする、などはこの極端なケースであるとも言えよう。

「我々の頭脳に納められている語彙の多くは、決まって一緒に用いられる単語の組み合わせから成り立っている。そのような組み合わせで用いられる語句の一方が起こると、もう片方の語句が起こることを

⁸ Jean Aitchison 'Reproductive furniture and extinguished professors' p. 11 in Steele, R. and T. Threadgold (eds.) 1987

⁹ A. Renouf and J. M. Sinclair 'Collcational frameworks in English' p. 143 in Aijmer, Karin and Bengt Altenberg 1991

¹⁰ Jean Aitchison *op. cit.* p. 14 in Steele, R. and T. Threadgold (eds.) 1987. () 内追加は筆者。

予想することができるとされている」¹¹

2.2 D. Crystal は「文中の主な単語の間には相互に期待 (expectancy) しあうところがある」として, It writhed on the ground in excruciating pain. (激しい痛みで地面をのたうちまわった)¹² という例文をあげている。excruciating は pain, agony などと共起することはあっても, joy, ignorance と共起することはない。同様に, writhe は agony, ground とは, 普通に共起する。ここには collocations, selectional restrictions があるとしている。これらは, いわゆる「熟語」とはレベルと趣を異にする緊密な関係にある語句である。

さらに, 英文 “She has taken all my food and drink away.” を見ると, take...away/take away...は何か具体的な物をその...部分に予想・期待しているし, all my...の配列は自然でも, *my all...は慣用に反するとか, 「飲食物」は*drink and food の語順を英語では取らない, といった点も見て取れる。

また, rain cats and dogs (土砂降りに雨が降る), live from hand to mouth (その日暮らしをする) などでは, これ以外の結びつきは選べない「固定表現」(fixed expression) となっている。対照的に, 形容詞 heavy は結びつくもう一方の相手として loss, traffic, burden, defeat, rain などと複数の, 少なからぬ相手を取る。しかし, 無制限に相手構わず結びつくことはない。この「相手を選び, 無制限な結びつきはしない」単語の関係(これは, ときに idiom principle と呼ばれる)を脑中の語彙に備えているかどうかは, 自然な英語を使える力と密接不可分である。

¹¹ Goeran Kjellmer ‘A mint of phrases’ p. 112 in Aijmer, Karin and Bengt Altenberg 1991

¹² David Crystal *op. cit.* (CUP 1995) p. 160

2.3 かつて, J. R. Firth (1890-1960) は格言をもじって “You shall know a word by the company it keeps.” と述べたことがある。彼の主張は一時期, 変形文法の圧倒的「流行」の中で影が薄かったが, ここへきて再び評価する声が高まってきた。いわゆる idiom principle; collocation のもつ意味合いの再評価である。彼とその流派は commit a murder [suicide] のように単語が共起するあるいは相互に選び合う関係にあるものを collocation と呼んでいるが, これは I like X. の like と X のような「自由結合・自由選択原理」(free combinations/open choice principle) をなすものとは大きく異なる。ここで X になりうるものは, ほとんど無制限にあるが, idiom principle; collocation 原理にはいわゆる「選択優先権」(選択制限) が見られるからである。

「イディオム原理は, 言語の使用者が単一の選択でなしうるたくさんの途中までできあがっている語句(仮に, それ以上の構成要素に分解可能と思われるものであっても)を手元に用意しているとするものである。ある程度, これは人間には同様な状況が繰り返し発生することの反映かもしれない。より少ない努力で効果を上げようという人間の自然な傾向の反映かもしれない。あるいは, 実際の対話の場面での差し迫った要請に対応するためかもしれない」¹³

2.4 G. Kennedy が指摘するように, 伝統的な扱いでは, 変形文法の方法も含めて「すでにできあがってまとまりをなしている語句 (prefabricated, ready-made sequences of words) の利用を, 軽視する傾向」が見られた。¹⁴ しかし, I haven't time *at the moment*. では, イタリック

¹³ John M. Sinclair 'Collocation : a progress report' p. 320 in Steele, R. and T. Threadgold (eds.) 1987

¹⁴ Kennedy, Graeme 1998 *An Introduction to Corpus Linguistics* Longman p. 109

部分を now の用法の一つに対応するものとして、いわば一つの単語化された単位として取り扱うことを拒む理由はない。¹⁵

at the moment のような結びつき方は「より小さな単位に分析可能かもしれないにも関わらず、あらかじめ用意され単一の選択肢をなすものとして広く用いられているたくさんの語句」に現れている。¹⁶そして、この原理はまた文章の形をなしている Did you have a good trip?, How long are you staying?, How are you going to do that?, I see what you mean. のような「習慣的に口から出てくるつながり」にも見られるものである。

G. Kennedy (1998; 110) は、50万語の英語口語コーパス London-Lund Corpus を分析した結果、70%が「繰り返し現れる結びつきの語句」(recurrent word combinations) であったという研究を紹介している。ここで言う「繰り返し現れる結びつきの語句」は、おおむね2～3語からなる very much, so many, quite clear, completely different, deeply divided, incredibly young のようなものを指している。こうした事実は、伝統的な「単語がまずあって、それに文法規則を適用して、文を構成する」という考え方が、一面的であることを示している。のみならず、その原理に過度にこだわっている言語教育は不要に過度の負担を学習者に強要していることも意味する。その結果が前述の「*寒い水」につながると見ることは、それほど的外れではない。

2.5 さて、次へ進む前にここで今までのところを少し整理しておこう。単語と単語の結びつきには、習慣的になっている「相互に依存・予測・期待が働く」結びつきとそうではない開かれた「自由・開放的な」結びつき

¹⁵ o'clock, breakfast などは少なくとも、その歴史的形成過程においてこれと同じものがあったと言える。

¹⁶ Sinclair (1991; 110) 'a large number of semi-preconstructed phrases that constitute single choices, even though they might appear to be analysable into segments'

がある。前者のグループにはまず, on hand (持ち合わせて, 居合わせて), wash one's hands (トイレに行く; 手を引く) のような idiom と呼ばれる「その個々の構成要素の総和とは異なる意味合いを持つ結びつきで, 固定化しているもの」がある。

D. Crystal は「習慣的にあらかじめ準備された結びつき」に相当するものを lexical phrase と呼んでいるが, これには,

- 1) by the way, so to speak, once and for all のような poly-word
- 2) How do you do?, Have a nice day., Long time no see. のような Institutionalized expression
- 3) as I was (saying/mentioning, etc.), good (morning/night, etc.), as far as I (can see/know, etc.) のような phrasal constraints
- 4) my point is that..., that reminds me of..., let me begin by... のような sentence builder

がある。¹⁷そして, これらと微妙なずれを持ちより広いさまざまな結びつきの collocation があるという構図になる。

しかしながら, この整理によっても相互の関係, 差違があまりすっきりとはしない。この分野の研究は, まだ歴史が浅く単語の「結びつき」に対する名称も必ずしも定まっていないところがある。collocation, idiom のような語を研究者によっては別の意味で用いているケースもある。従って, 我々はここでは分類や命名にあえてこれ以上深入りすることは避けて, 先へ進むこととする。ただし, その前提としてコロケーション (collocates) の定義を 'lexical items occurring within five words either way of the headword with a greater frequency than the law of averages would lead you expect.'¹⁸ 'collocations are defined as recurring

¹⁷ David Crystal *op. cit.* (CUP 1995) p. 163

¹⁸ Sinclair, J. M. (ed.) 1987 *Looking up*. Collins p. 70

sequences that have grammatical structures. ... collocation will be used in the sense of structured patterns which recur in identical form.’¹⁹をふまえたもの、としておきたい。従って、「共起する結びつき」を越えた細かな区別や条件をここでは必要以上には持ち込まずに、先へ進むことにする。

3.1 さて我々は、ここで英語の collocation を英語の語結合の中で「核となるもの」とする視点からその実態を見てみることにする。

文部省は英語を教える際に習得させるべき事項として「連語」をあげているが、曖昧な用語で、我々がここで取り上げている collocation とかなりだぶっている。英語全体といった漠然とした膨大なものではなく、今回は対象を絞って日本人学習者に関係の深いものに限定することとし、そのために、便宜上選んだものが「英語 I, II」の教科書である。本稿執筆時点で利用されている教科書は49種類あり、I, II 合計で98冊ある（次頁の表）。ここでは、その教科書の中で先に挙げた collocation の定義に当てはまるものを調査することとした。

「核となる表現」の中心語は、当然にも頻度の高いものになるものと思われる。というよりも、逆に頻度の高いものが「核となる表現」を形成すると考えるべきである。ここでは collocation の定義に当てはまる「共起する結びつき」「グループをなす語句」を見てゆくのであるから、その中心語は名詞・動詞・形容詞・副詞となる。作業順序として、教科書の中に現れるこれらの語類・品詞に属するものを頻度順に抽出し、その中で、とりあえず300回以上の出現例を持つものを集めてみることにした。

「英語 I, II」の中で、前置詞・接続詞・代名詞・冠詞・固有名詞・感嘆詞などを除いて、結びつきの中核 (node) となりうるものの中で最も頻度のある語は people であった。そして、その最も頻繁に見られる結びつ

¹⁹ Goeran Kjellmer *op. cit.* p. 116

表 教科書とその出版社一覧

東書	NEW HORIZON English Course
東書	Go, English!
中教	AURORA
開隆堂	ENGLISH NOW
開隆堂	PHENIX English Course
開隆堂	Sunshine ENGLISH COURSE
学図	WHY ENGLISH
学図	HELLOW ENGLISH
三省堂	The CROWN English Series
三省堂	Dream-Maker ENGLISH SERIES
三省堂	VISTA English Series
教出	ONE WORLD English Course
教出	Lingua-Land English Course
開拓	LEGEND ENGLISH
開拓	NEW HARMONY English Course
開拓	ACCESS TO ENGLISH
大修館	Genius English Course
大修館	CLIPPER ENGLISH COURSE
啓林館	MILESTONE English Course
啓林館	OCEAN English Course
数研	POLESTAR English Course
研究社	The New Age English
研究社	LIGHTHOUSE ENGLISH
文英堂	UNICORN ENGLISH COURSE
文英堂	POWWOW ENGLISH COURSE
文英堂	APRICOT ENGLISH COURSE
池田	NEW STAGE English Course
池田	DAILY ENGLISH COURSE
一橋	ACTIVE ENGLISH
一橋	NEW STEP ENGLISH
筑摩	RACCOON ENGLISH COURSE
筑摩	WINDMILL ENGLISH COURSE
旺文社	Step English
旺文社	New Sunrise English
旺文社	Royal English
尚学	PROGRESSIVE English Course
尚学	QUEST ENGLISH COURSE
増進堂	MAINSTREAM
増進堂	NEW STREAM
第一	CREATIVE English Course
第一	Evergreen English Course
第一	ENGLISH STREET
秀出	NEW SENIOR TOTAL ENGLISH
秀出	New ENCOUNTER ENGLISH
三友	NEW WORLD ENGLISH COURSE
三友	NEW COSMOS ENGLISH COURSE
三友	New Atlas ENGLISH COURSE
桐原	SPECTRUM ENGLISH COURSE
桐原	English PAL

きは長い方から, *the people in the United States* (10回, 以下同じ); *people all over the world* (25), *all the people in the...* (7); *a lot of people* (30), *more and more people* (21); *many people who...* などとなっている。このように, *people* を中心として, 左右に何語くらいの長さ (span) までを collocation, cluster の範囲とするかで, 結果に開きが出るが, 先の Sinclair による collocation の定義に沿って span として前後に 5 語を設定してみた。英語の collocation の 95% 以上がこの範囲に収まるという結果が, Sinclair によって報告されている。²⁰

3.2 以下では, node から 3 つまでの span で現れるものを中心にして報告する。²¹

people	<i>people in the N, the people of N, a lot of people</i>
like	<i>I'd like to Inf, do you like...?, would you like...?</i>

²⁰ Cf. Ooi, Vincent B. Y. 1998 *Computer Corpus Lexicography* Edinburgh University Press p. 76

'more than 95% of all relevant [rexical relations] is obtained by examining collocates within a span of -5 and +5 (disregarding punctuation)'.

それぞれの用語の定義は:

span=the co-text within which the collocates are said to occur

node=the lexical item whose collocational pattern we are looking for

collocate=any lexical item which co-occurs with the node within specified co-text

²¹ 配列は教科書での出現頻度の順番であるが, 中には cluster をなさなくて省かれているものがあるので, 表の作成段階でところによっては順位が跳んでいる。略表示の意味は, N=noun, Inf=infinitive, Art=a, an, the, S=subject, C=complement, Pron=pronoun, Adj=adjective。なお, この分析では Mike Scott の WordSmith (1996) をツール・プログラムとして用いた。

time	<i>the first time, a long time, the same time</i>
know	<i>do you know...?, I don't know, did not know</i>
day	<i>the next day, of the day, day after day</i>
now	<i>Pron be now, now he was, now and then</i>
only	<i>only a few, S is the only C, not the only</i>
first	<i>the first time, for the first, S was the first</i>
world	<i>in/of/over/around the world</i>
man	<i>Art old man, Art young man, Art man who</i>
think	<i>do you think...?, I don't think, what do you think...?</i>
good	<i>a very good, a good idea, have a good N</i>
way	<i>in this way, by the way, all the way, the best way</i>
too	<i>too tired to, a little too Adj, that's too bad</i>
get	<i>get to N, get out of N, get used to N</i>
well	<i>as well as, well I think, well I don't</i>
years	<i>a few years, for many years, thousands of years</i>
old	<i>of the old N, years old, in the old N</i>
life	<i>Art way of life, in my life, life in the N</i>
came	<i>came to the N, came out of N, I came to</i>
little	<i>S was a little, a little boy/girl, a little more</i>
long	<i>a long time, as long as</i>
say	<i>some people say, you can say</i>
made	<i>made up of, made a mistake, made a lot</i>
why	<i>why don't you...?, why do you...?, that is why</i>
school	<i>go to school, high school students, in high school</i>
home	<i>go home, outside the home, the home of N</i>
right	<i>be all right, the right to, on the right</i>
thought	<i>thought it was, thought that Clause, I thought about</i>
take	<i>take care of, take part in</i>
things	<i>a lot of things, the things that, all these things</i>
look	<i>look at the N/ this (N)/him, look for, a look at</i>

asked	<i>asked me to Inf, was asked to Inf</i>
work	<i>work in N, work for N, work in the N</i>
year	<i>of the year, the next year, for a year</i>
water	<i>of the water, into the water, in the water</i>
different	<i>different from the N, different kinds of, in a different</i>
got	<i>got to the N, when I got, got out of</i>
great	<i>was a great, of the great, a great deal</i>
use	<i>the use of N, use the N, how to use</i>
young	<i>Art young man, the young people</i>
put	<i>put it in, put it on</i>
find	<i>find out, you will find, could not find</i>
always	<i>are not always, he was always, there is always</i>
really	<i>I was really, really want to Inf, is not really</i>
looked	<i>looked at Art N, looked up at</i>
night	<i>late at night, the night before, the night sky</i>
earth	<i>of the earth, on the earth</i>
give	<i>give up, give Pron Art N</i>
last	<i>at last, in the last</i>
often	<i>Pron be often, as often as</i>
lot	<i>a lot of, a lot about</i>
live	<i>live in Art N, live with</i>
help	<i>the help of, with the help</i>
small	<i>in a small, a small town, is a small</i>
name	<i>the name of, my name is</i>
found	<i>found that Cause, found out that Clause</i>
own	<i>have one's own, in their own, of his own</i>
language	<i>a foreign language, the English language, the language of</i>
love	<i>in love with, I love you, fell in love</i>
family	<i>of the family, in the family</i>
country	<i>of the country, in the country, a foreign country</i>

days	<i>a few days, in those days, few days later</i>
hard	<i>hard to believe, as hard as, a hard time</i>
today	<i>in the world today, today it is, today there are</i>
important	<i>the most important, a very important, is very important</i>
feel	<i>feel sorry for, do you feel...?, began to feel</i>
house	<i>of the house, in the house, in front of the house, to the house</i>
friends	<i>my friends and N, make friends with, of my friends</i>
few	<i>a few days, a few minutes, only a few</i>
eyes	<i>the eyes of, in his/her eyes</i>
countries	<i>in many/other/some countries, from other countries</i>
left	<i>on the left, his left hand, the left side</i>
words	<i>in other words, a few words, the words of N</i>
soon	<i>as soon as, soon after the N</i>
later	<i>a few days later, an hour later, two days later</i>
boy	<i>Art little boy, said the boy, Art boy who</i>
hand	<i>the other hand, in his hand, hand in hand</i>
morning	<i>in the morning, the next morning, the morning of</i>
face	<i>the face of N, face to face, in the face</i>
became	<i>became the first, he became a N, became known as</i>
place	<i>the place where, a good place, a place to Inf</i>
part	<i>part of the N, a part of, take part in</i>
person	<i>a person who, the other person, the first person to</i>
money	<i>a lot of money, have enough money, raise money</i>
better	<i>much better than, make a better N, a better life</i>
happy	<i>was very happy, was happy to</i>
become	<i>become aware of, decided to become</i>
beautiful	<i>the most beautiful, was a beautiful N, such a beautiful N</i>
black	<i>black and white, the black people</i>
door	<i>at the door, to the door, open the door</i>
course	<i>of course, of course not</i>

room	<i>the living room, of the room, into the room</i>
thing	<i>the same thing, thing to do, for one thing, such a thing</i>
learn	<i>learn how to Inf, learn about, had to learn</i>
woman	<i>a young woman, the first woman, said the woman</i>
air	<i>in the air, into the air</i>
kind	<i>a kind of, what kind of...?, this kind of</i>
felt	<i>I felt a N, she felt that, felt as if</i>
story	<i>the story of, a story about, is a story</i>

4.1 100個の「現れ語」(token) のまま並べてある上記の一覧表の中で、見出し語 (type: headword) レベルに換算してみると、文部省の「中学必修507語」に含まれていないのは、air, course, earth, own, part, person, place の7語である。

見渡してみると、必ずしも表現として「おもしろい」「興味がある」ものが多いとは言えない。おそらく従来なされてきた「用例収集」の慣例からすれば、その対象とすらならないと思われるものもある。実はそこに落とし穴があると思われる。

そのあたりの事情を、アトランダムに途中の4連続項目を例に少し触れてみよう。

- 1) life (名詞) *Art way of life, in my life, life in the N*
- 2) came (動詞) *came to the N, came out of N, I came to*
- 3) little (形・副詞) *S was a little, a little boy/girl, a little more*
- 4) long (形容詞) *a long time, as long as*

1) *one's way of life* を典型とするこの表現は、30回用いられている。「ウェイ・オブ・ライフ」と日本語で言われるほどに普通の結びつきである。in my life だけで25回あるが、これも in *one's/Adj way of life* の形

にすると、たちまち数倍に膨らむ。Adj life in the N の結びつきは21回ある。英語の品詞 Adj, N は無限に近い膨大な数にのぼることを考えると、この結びつきの発展性はきわめて大きい。なお、John Sinclair らによる Bank of English の調査によると life と collocation をなす語 (collocates) の上位 5 語は new, way, real, own, time であった。²²

2) これは現在形の come, comes なども含めて考えなければならないから、ここに見られる現象は数倍の頻度力を持つことになる。came to the N は42回現れるが、この結びつきも、open class の名詞が相手なので、無数に膨らむ。came out of N (28回) にも同じことが当てはまる。I came to... では後ろに名詞要素と従えて「～に来了」となるもののほかに、不定詞の think, feel, know, like などの例が加わる。収集の視点が異なるが、John Sinclair らの collocate 上位 5 語は back, first, down, here, before である。我々のように前置詞を含む結合だけを問題にすると、to, in, from, with, out となる。

3) *S was a little...* では、S に名詞・代名詞のほかに、there の来るパターンがある。あとの ... には名詞・形容詞・副詞の来るパターンがあることになる。*a little boy/girl* は名詞パターンの代表、*a little more* は形容詞・副詞パターンの一つと位置づけられる。*a little* だけを独立させると、little, a little; few, a few の例の対立項目と関係するし、この 3) も複雑な問題を抱えている。また、3) の項目自体を「cluster をなしていない」と見ることも可能であろう。John Sinclair らの collocate 上位 5 語は more, bit, very, just, too である。

4) *a long time* は120回現れる。反対概念の *a short time* は28回である。この open class である形容詞をいろいろとかえることでかなりの数の組み合わせが、教科書だけでもあることになる。*as long as* は54回現れる。ここで、読者はやっと (?) 「熟語」らしい表現にお目にかかることになった

²² COBUILD *English Collocations on CD-ROM* HarperCollins 1995

かもしれない。John Sinclair らの collocate 上位 5 語は term, time, before, way, ago である。

これら、4 項目に共通するのは、その「頻度」(frequency)と「発展性」(productivity)「有用度」(usability)の高さであろう。生涯に再度お目にかかりそうもないような語句を懸命に覚えさせられる若者が絶えないことを考えるとき、従来の語彙学習題材への根本的な反省と改革の必要性は無視できないであろう。

4.2 ここでは、現行の英語教科書「英語 I」「英語 II」に対象を絞って前記の定義に従って collocation, 「連語」をなすものを見てみた。検定教科書は文部省の指定する「文型・文法」を必ず入れなくてはならないので、そのせいで多少偏りが増えた面があるかもしれない点は否定できない。

house を見ると *of the house*, *in the house*, *in front of the house*, *to the house* が並んでいるが、「空間」を示す house と前置詞の組み合わせが高い頻度の cluster をなしている。Why では、Why don't you...?, Why do you...?, That's why... のような「決まり文句」が並んでいる。これらを口にするとき文法規則によって単語を配列するといった操作がどこかでなされているとするのはまことに不自然で、ほとんど無意識のうちにあたかも 1 語を口にするかのごとくに発せられるのが実態である。

このような結びつきが、高い頻度故にそのまま分解されずに習得され、集積されて脳中に格納されるとする見方は、説得力を持つ。ここで見てきた結びつきの認定には未だ解決すべき点がいくつかあるが、²³ 従来ふつうにおこなわれてきた「熟語」と異なるレベルでの親密な結びつきが持つて

²³ 現行の「英語 I, II」のすべての教科書を対象としたとはいえ 80 万語以下の token しかない。各語のコロケーションを正確に見るには、少なくとも British National Corpus (1 億 token) ほどのコーパスでの分析が必要である。しかし、この BNC のデータ利用に「不当な」制限のある現時点では、日本での研究者には望めない。

いる意味合いは大きなものがある。

4.3 我々にとって重要なのは、繰り返して現れる結びつき (cluster; pattern) である。上記の一覧表に載せられている結びつきは、それぞれが無関係でアトランダムな切れ端ではない。「英語にはある単語の生起がもう一つの単語の生起を、その前であれ後ろであれ、予想させるケースが非常にたくさんある」²⁴とされているものの一部である。

本稿の執筆意図を非常によく説明しているのでやや長くなるが、G. Kjellmer から引用し、結びとしたい。

ネーティブスピーカーの語彙の大きな部分を構成している「連語的」(collocational) な方法は、第二語あるいは外国語としての学習者にとって重大な意味を持っている。……

ネーティブスピーカーは言語の多くの部分に対する自動的制御力を獲得し、休止 (pause) をその先の 1～2 の思考単位を考えるのに用いている。発話を作り上げる際に、ネーティブスピーカーはあらかじめ作り上げられた部品を大いに利用している。学習者は、逆に、こうした自動化された連語をわずかししか持たないので、ネーティブスピーカーに受け入れられると期待される単語の結びつきを絶えず作り出さなければならない。その上さらに、自分の思考単位を練り上げなければならないが、休止は大部分、かなり些細な語構造レベルの決定に費やされるものと思わなければならない。いわば、学習者の用いる建築材料は、あらかじめ作り上げられている部品ではなくて、一つ一つの(組み合わせて形にしていかなければならない—高橋)煉瓦なのである。だから学習者が、仮に自信がなく不安で躊躇しているのではなくて

²⁴ Aston, Guy and Lou Burnard 1998 *The BNC Handbook: Exploring the British National Corpus with SARA* Edinburgh University Press p. 13

も、必然的に途中で立ち往生したり、出来あがったものがしばしばネーティブスピーカーの耳にとって不自然だったり、全くものにならなかったりする。同じようなことは書いた場合にも起こる。

こうした問題に対応する学習・教授法の一つは、新しい手を取ることである。単語学習では、個々バラバラに教えたり学んだりするのではなくて、ふさわしい文脈のなかでのみこれを行うことである。つまり、個々バラバラの単語習得から、それが自然に発生する連語 (collocation) の習得へと重点を移すことである。……

語彙学習は、きわめて基礎の段階からずっと引き続き、語彙が実際にどのように用いられているかに焦点を合わせるべきである。句 (lexical phrases) が言語行為の実際の基本である。……

単語の学習にとって連語的学習法はあらゆる場面、あらゆる段階で望まれる。これは学習者がまだ高頻度の単語に主として集中している単語学習のかなり初期的段階でとくに重要であるかもしれない。

初期の段階で「連語学習習慣」を身につけた学習者は、そうでないものに比べて自信を持ってさらに語彙学習を続けることができると思われる。²⁵

彼の言う「初期の段階」とは、日本人学習者の場合にはとりわけ中・高等学校の段階に当たるものと考えてよいであろう。

References

- Aijmer, Karin and Bengt Altenberg 1991 *English Corpus Linguistics Studies in Honour of Jan Svartvik* Longman
- Aston, Guy and Lou Burnard 1998 *The BNC Handbook: Exploring the*

²⁵ Goeran Kjellmer *op. cit.* p. 124f in Aijmer, Karin and Bengt Altenberg 1991

- British National Corpus with SARA* Edinburgh University Press
- Biber, Douglas, Susan Conrad, and Randi Reppen 1998 *Corpus linguistics: Investing language structure and use* Cambridge University Press
- Bogaards, Paul 1966 'Dictionary for Learners of English' *International Journal of Lexicography*, Vol. 9 No. 4 277-320 Oxford University Press
- Crystal, David 1995 *The Cambridge Encyclopedia of the English Language* Cambridge University Press
- Garside, Roger, Geoffrey Leech and Geoffrey Sampson (ed.) 1987 *The Computational Analysis of English* Longman
- Greenbaum, Sydney 1996 *The Oxford English Grammar* The Oxford University Press
- Kennedy, Graeme 1998 *An Introduction to Corpus Linguistics* Longman
- Kilgarriff, Adam 1997 'Putting frequencies in the dictionary' *International Journal of Lexicography*, Vol. 10 No. 2 135-155 Oxford University Press
- McEnery, Tony and Andrew Wilson 1996/97 *Corpus Linguistics* Edinburgh University Press
- Ooi, Vincent B. Y. 1998 *Computer Corpus Lexicography* Edinburgh University Press
- Scott, Mike, Tim Johns and Oxford University Press 1993 *MicroConcord Manual* Oxford University Press
- Sinclair, J. M. (ed.) 1987 *Looking up*. Collins
- Sinclair, J. M. 1991 *Corpus, Concordance, Collocation* Oxford University Press
- Steele, R. and T. Threadgold (eds.) 1987 *Language Topics. Essay in Honour of Michael Halliday* (2vols) John Benjamins

Synopsis

In Search of 'Core Expressions' in English

Kiyoshi Takahashi

This article is an experiment to select 'core expressions' in English for Japanese learners of the English language.

English sentences have traditionally been thought to be composed of phrase(s), and phrases are composed of word(s). This is partly true, but from this point of view, words are the basic elements to be learned and stored in our brain, which are later combined by grammatical rules. However, this 'word-based' theory seems to be wrong.

There seems to be many cases in English where the occurrence of one word predicts the occurrence of another, either following or preceding it. Many of them do not make 'idioms' but they are very close combinations of highly used frequent words. These close combinations of words or collocations are reasonably stored in our brains as a unit. It is these collocations that greatly decide whether our expressions are natural or not although it is sometimes very difficult to explain why.

By examining all the texts in Japanese high school textbooks "English I and II", the author tried to find what combinations there are and then examine which should be included among essential collocations for the Japanese learners of English.